

槐

かい

岡井省二創刊

平成25年4月号

平成二十五年四月一日発行 第二十三卷第三号 通巻第一六二号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



師の一言

高橋将夫

人間に神と仰がれ冬の山
時流には遠き浮き寝の一羽かな
波音は闇が吸ひ込む冬銀河
人に有る神の遺伝子寒念仏

胎児もう海鼠の時期は過ぎにけり
正式な型なかりし鴨の陣
大鷲の巢は絶巔になかりけり
心字池寒月光の透徹す
迷想の中の一点冬北斗
冬銀河大河は音もなく流る
師の一言寒柝の一打かな

槐安集

水野恒彦

初明りわが胸にある火の欠片
ぼつぺんを吹くと日暮の遅くなる
死に欲もいいではないか骨正月
眉焦がす左義長前世のことしらず
電柱の一本立てり枯野原

延広禎一

立春の潮差して来し能衣裳
枯芙蓉まろき命のひそみをる
騎士の舞ふからくり時計初山河
カルメ焼のあぶく立ちたる女正月
恵方道封印切の縁かな



加藤みき

船笛の寝ぼけたこゑなり春の風
赤ん坊の握り締めたる年の豆
大試験神杉にいろ戻り初む
茶の花の迫り出してゐる金の蕊
冬泉何かと言へば集まりて

石脇みはる

降り止んでぐるり枯野と青菜畑
福藁を敷いて田ごとのふくいくと
嬉々としてとんだのぐるりとびはねし
ゆるゆると琴坂をゆく小正月
実南天わらべ歌くちずさみけり

中島陽華

初夢の姥石の上きのこあり
みほとけの埃戴き師走空
空海に似たる手品師炬燵かな
河童絵の我鬼のサインや春隣
海に向く墓地ゆづりはの密なりき

竹内悦子

初春の箱鮓ひとつ頬張りぬ
天の原どんど火の風舞うてをり
傘寿にて初弘法に紛れゐる
丸帯も売られてゐたる初大師
双子にて飛び出してくる寒卵

大島翠木

伐られずに枯れずに残る冬桜
初日影川に上流下流あり
雪吊りより長き廊下や福寿草
魂を愚直に生きん路の臺
大皿に霧のただよふ牡丹雪

雨村敏子

青鷹祝「青鷹」槐の森の日当れる
百代の過客こぞりて恵方みち
鉛筆を揃へ机上の初景色
お降りのこの世を濡らし過ぎにけり
書いたり消したり一月の消しゴム

本多俊子

初 茜 天 地 ひ び き あ ふ や う に
大 い な る 気 を 吐 き だ し て 山 眠 る
初 山 河 橋 の 長 き を と ほ り ゆ く
公 魚 の 湖 の 蒼 さ に 染 ま り け り
亡 き 父 母 の 正 座 思 へ り 粥 柱

近藤喜子

蝶 凍 て 此 の 世 の 外 を 見 て を り ぬ
宇 津 田 姫 こ の 世 あ か る く 染 め か へ る
宇津田姫・雪の神様
雪 か ぶ り 眠 り の 深 き 雪 う さ ぎ
凍 り た く な き 一 水 の 流 れ を り
鬼 や ら ひ 闇 に 濃 淡 あ り に け り

谷村幸子

神 宿 す 松 に 雪 あ り 情 あ り
ど つ と 来 し 葡 萄 畑 の 寒 雀
大 樟 の 枝 き る 匂 ひ 寒 諸 子
寒 月 や ロ ビ ー に 吊 す 能 衣 裳
山 門 の 箴 言 う す れ 冬 う ら ら

瀬川公馨

闇 ふ か し 青 女 が う か と 男 帯
冬 眠 に 入 ら ぬ 山 鼠 の 落 髪 す
莫 言 の 夢 や 現 や 年 明 く る
残 菊 に 飢 ゑ と 恐 れ の あ り ぬ べ し
み ん な み に 台 湾 坊 主 の こ 糸 上 ぐ る

久保東海司

お山焼終の炎は闇に伏す
葬列や棺を運ぶ息白し
年惜しみつつ反古の火を昂ぶらせ
雪濡れのたてがみを梳く大根馬
積雪の高さを目もて測りけり

中野京子

見なれたる景色が光る初御空
欲なしと思ほし欲の初みくじ
人の世は坊主めくりの歌留多かな
生き方を日々に試して去年今年
点滴は脈に重なり初山河

柳川 晋

玉珧を捌きて猿田彦を待つ
己が影その真ン中へ寒ごやし
鈍色の運河も春の通り道
少年が心に棲みて春を待つ
豆を打つ予定調和は嫌ひなり

岩下芳子

三日はや台風一号生まれたる
初鴉一札ありて鳴き交す
大寒や大木の洞覗きたる
裸木の幹に留めし日のぬくみ
この道は抜けられませんか日脚伸び

槐市集

近藤紀子

皆の紅はんなりと初芝居
法堂への渡り廊下に鐘と雪
年用意妣の口ぐせよみがへる
極月やルーベンスの絵をネロと見る
冬霧の晴れて水車の静かなり

ネロ＝フランシスカの主人公

柴田靖子

化粧して懸想せしころ春きざす
明日の夢を満身に春着かな
心に一字残されたあの春の日
荒涼の枯野輝やく落日かな
生きし時は確かなるもの枯蟪蛄

庄司久美子

初鴉落款押してをりにけり
朝ぼらけ竹藪ぬける二日かな
トンネルの大口あける牡丹雪
冬萌や双魚の尾鰭やや動き
着ぶくれやどうもどうもと分け進む

杉原ツタ子

よろこびのひとつひとつや実南天
病棟の明けの静けさ初茜
先がけの菜の花ゆれる入日影
初暦吾子に逢ふ日の印かな
初松籟若人の背を押しにけり



槐集

高橋将夫選

四方拝神話より飛ぶ紅孔雀
枚方 熊川 暁子
初日の出太平洋へあふれだす

なまはげが赤き草履を提げてゆく
勾玉の穴よりのぞく年男
タンシチューにて冬將軍をもてなさん

初春ぞ上座に座れ笑ひ神
京都 竹中 一花

神泉苑

池近き恵方の神に雲の道

空海の繪に値札ある初弘法

京菜洗ふ比叡の裾の雪解水

冬夕焼墓地くれなゐの影に入る

幻日の風の行方を見失ふ
寝屋川 前田美恵子

春の鴨光となりて波となる

Gパンに春日のにほひしてゐたる

清盛の凍てたる夢や厳島

湯煙の真中にをり去年今年

双六の賽の軽さに身を預く
大阪 有松 洋子
寒風に耳吹つ飛んでしまひけり

冬さぶや足音硬く闇を踏む

ドアノブの冷たさ真夜がそこにゐる

初東風や妊婦みどりに光りをり

八咫鳥を待つ寒靄の大鳥居
摂津 中田 禎子

銀色に鎮もる野面初茜

氷割り清めの水を使ひたる

言霊のずしりと胸に初みくじ

巳の杉の洞天空へ寒卵

未知を求めて正月の浜に立つ
岡山 岩月優美子

クリムト風

クリムトの彩に肖る春着かな

寒紅の濃さ鏡中に罪と罰

胸に棲む人と見上げし寒北斗

田平子や鄙びし里にある未来

銀河往来 高橋将夫

◆「槐集」 観照

四方 拝神話より 飛ぶ紅孔雀 熊川 曉子

四方拝は一月一日に行なわれる宮廷行事で、天皇が天地四方を拝して天下太平等を祈る儀式。神話の世界から紅孔雀が飛び出したというから、吉兆に違いない。めでたい。

〈初日の出太平洋へあふれだす〉の句は、「あふれだす」の措辞が力強い。〈なまはげが赤き草履を提げてゆく〉と〈勾玉の穴よりのぞく年男〉の句には生活感がある。〈タンシチューにて冬將軍をもてなさん〉には冬に対峙する作者の気構えが感じられる。どの句にも作者らしさが溢れているように。

空海の絵に 値札ある 初弘法 竹中 一花

初弘法（初大師）は二月十一日の弘法大師の初縁日。近畿では京都の東寺が最もにぎわう。そこで売られている絵の中に弘法大師の絵もあって、値札が付いているという。どの絵にも値札がついているわけで、弘法大師の絵にも値札があつて当たり前なのに、「弘法大師さんに値札」というのがなんとなくミスマッチに感じられてほえましい。

〈京葉洗ふ比叡の裾の雪解水〉の句は非常にすがすがしい。池近き恵方の神に雲の道〉の句の「雲の道」、〈冬夕焼墓地くれなゐの影に入る〉の「くれなゐの影」は作者ならではの視点。

清盛の凍てたる 夢や 厳島 前田美恵子

厳冬の厳島神社の景。作者は平清盛の栄華の夢が凍りついた姿をそこに見ているのである。

〈幻日の風の行方を見失ふ〉、幻日は光の屈折で太陽の左右に光る点が現れる現象。神秘的な現象だから風の行方を見失ってふしぎはない。〈春の鴨光となりて波となる〉の「光となりて波となる」は作者ならではの感性。

ドアノブの冷たさ 真夜がそこにある 有松 洋子
ドアノブの冷たさに改めて冬の闇の深さを感じたのだろう。「真夜がそこにある」は、ふと〈戦争が廊下の奥に立つてゐた渡辺白泉〉を思い出させる。

〈双六の賽の軽さに身を預く〉の「春の軽さに身を預く」や〈冬さぶや足音硬く闇を踏む〉の「足音硬く闇を踏む」や〈寒風に耳吹つ飛んでしまひけり〉の「耳吹つ飛んで」や〈初東風や妊婦みどりに光りをり〉の「妊婦みどりに光り」の措辞は決して知的操作から出てくるものではない。作者の心の風景として湧き出てきたものと推察する。

言霊のずしりと 胸に 初みくじ 中田 禎子
たかが御籤とはいいいながら、その結果に一喜一憂するのが人の世の常。それにしても「ずしりと胸に」きたとは、よほどこたえる内容だったのであろう。

胸に 棲む 人と 見上げし 寒北斗 岩月優美子
寒々と北斗七星を見ている寒夜。しかし、胸に棲む人と見ているところに救いがある。

その 先に 神の 国 あり 風 谷岡 尚美
風がよほど高く揚がったのであろう。「その先に神の国あり」という発想はおおらかでよい。（以下略）